

時間的接続表現「うちに」の意味特徴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 美和子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学外国語研究科
URL	https://doi.org/10.18956/00006347

時間的接続表現「うちに」の意味特徴*

田 中 美和子

0. はじめに

本稿の目的は、時間的表現ウチニ¹の持つ意味をアイダニと比較しながら明らかにすることである。ウチニとアイダニは、どちらも幅のある期間を提示する時間的接続表現である。次のウチニが用いられた文（以下、ウチニ文）を見られたい。これは、アイダニが用いられた文（以下、アイダニ文）に言い換えることが可能である。

- (1) あたたかいうちに（あいだに）、食べてみて （吉本ばなな『キッチン』）

この言い換えは、次のように否定文をウチニに先行させても容認可能である。

- (2) 知らないうちに（あいだに）夢中になった

これらはどちらも容認されるものの、どこか意味が異なっているように思われる。「鉄は熱いうちに打て」というウチニ文を「鉄は熱いあいだに打て」とアイダニ文に言い換えても文法的には何の問題も無い。しかし、慣習的には「鉄は熱いうちに打て」と言う方が普通である。また、「若いうちに勉強せよ」というウチニ文を「若いあいだに勉強せよ」とアイダニ文に言い換えても文法的には何の問題もないが、これも慣習的には「若いうちに勉強せよ」と言う方が自然であろう。

しかしながら、ウチニをアイダニと言い換えても容認される例ばかりではない。次のウチニ文はアイダニ文と言い換えるとすわりが悪くなり容認されない。

- (3) 近いうちに（*あいだに）北海道を旅行する予定です

この言い換えは、否定文が先行しても同様に容認されない。

- (4) 暗くならないうちに（*あいだに）帰ってきなさい

これらの例で容認度に差が生まれることから、ウチニとアイダニにはやはり意味的な違いがあることは明らかになった。

渡辺(1995)では、「わがこと・ひとごと²」という概念を用いて、時間把握には話者が時間の流れを「自分³に関わる流れ（わがこと）」と見るのか、それとも「自分から離れた流れ

(ひとごと)」とみるのかの違いがあると述べている¹⁴⁾。本稿ではこの概念をウチニとアイダニに適用し、ウチニは「自分に関わる流れ」として時間を把握する主体的意義¹⁵⁾を持つ接統表現であるのに対し、アイダニは、「自分から離れた流れ」として時間を把握する接統表現であると主張する¹⁶⁾。

第一節で先行研究を検討して問題点を提示する。第二節では、ウチニとアイダニはそれぞれ「内(うち)」と「間(あいだ)」という空間表現から時間表現へのメタファー的写像であると考えた立場から、それぞれのイメージスキーマを提案する。次にウチニ文をモデル化し、その語彙的制約、評価的条件、構文的構造を検討し、ウチニの持つ対象的意義と主体的意義を説明する。また、アイダニにも同様の分析を行う。第三節で、ウチニは主体的意義と対象的意義を併せ持つのに対し、アイダニは対象的意義のみを持つ時間的接統表現であると結論付ける。

1. 先行研究の問題点

1.1. 時間的境界

先行研究には、「時間的境界は不定」とする説と、「時間的境界は明確」とする説の二つが存在する。本節では、両方を紹介する。

1.1.1. 時間的境界は不定とする説 (Alfonso 1966; 久野1973)

まず最初に、ウチニの「時間的境界は不定」とする先行研究を紹介する。

Alfonso(1966)は、ウチとアイダを比較した。次に引用するように、ウチは、空間の概念“the space within”が時間に適用され、始まりも終わりも境界線は不定であると述べている。一方、アイダは空間の概念“the space between”が時間に適応され、始まりと終わりに確定した境界線を持つとしている。すなわち、Alfonso(1966)は、ウチは「時間的境界は不定」であるのに対し、アイダニは「時間的境界は明確」だと考えていた。

“One way of difference between UCHI and AIDA is that the latter signifies a very determinate interval whose beginning and end are clearly defined, whereas the former signifies an interval with undefined boundaries.” (Alfonso. 1966:601, 下線筆者)

ところが、Alfonso(1966)は、ウチもアイダも英語になると while という同じ接統詞にパラフレーズしてしまい、これらの違いは結局は無視されている。

一方、久野(1973)はウチニをマエニと比較し、ウチニは「線的な期間を指し、始点も終点も不定である」として、マエニは「点的で始点も終点も明らかである」と述べている。すなわち、ウチニは「時間的境界は不定」のに対し、マエニは「時間的境界は明確」と考えていた。例えば、「暗くならないうちに帰ってくるのですよ」が容認されるのは、何時何分に暗くなるか予

めわかっていないときであり、いつ暗くなるのか前もって知っている「暗くなるまえに帰ってくるのですよ」と言うとしている。久野(1973)による明確な「時間的境界」とは、具体的に「何時何分」や「何月何日」という時刻や日付などの客観的な知識を指す。ウチニを用いる場合は、このような時間的理解が話し手と聞き手にないために「緊迫感」が生まれる表現だとした。

1.1.2. 時間的境界は明確とする説(松中2001a, b)

次は、逆にウチニは「時間的境界は明確」とする先行研究を紹介する。

松中(2001a)はウチニ、そして松中(2001b)はウチニとアイダニについて論じている。松中(2001a)は、Lakoff(1990)の“Event Structure Metaphor: States are bounded region in space”を引用して、状態とは囲まれた空間であるので境界線を持ち、空間を表すウチが時間に用いられるとその時間は境界線を持つのだと述べている。そして、ウチニはある時間の範囲の中(S1)にもう一つの時間の範囲あるいは時点(S2)を内包するという図式であるという分析を踏まえて、次のようなスキーマで図示した。また、松中(2001b)は、ウチニは「時間的境界線は明確」であるのに対し、アイダニは「時間的境界線が薄い(不定)」と述べている。

図1 「うち」のスキーマ(松中2001b)

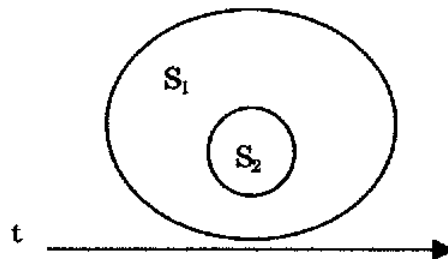
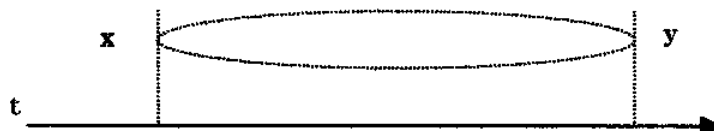


図2 「あいだ」のスキーマ(松中2001b) x: starting point, y: end point



また、次の例を見られたい。

- (5) *祖父が死んでいるうちにその遺産を親族で分配した。(松中2001a)

この場合、「祖父が死んでいる」という時間は終了点がない。したがって、この「祖父」が将来生き返るといふ文脈でもない限り、S1に時間的境界がないため例文(5)は容認されない、としている。松中(2001a)ではアイダニに対する議論はなされていない。

1.1.3. まとめ

以上、ウチニが提示する時間が「時間的境界線は明確」とする説と、「時間的境界線は不定」とする説の両方を検討した。ウチニが提示する時間の境界線は明確なのだろうか、言い換えれば、その始まりと終わりは明確なのだろうか、それとも不明確なのだろうか。

まず、ウチニが提示する「時間的境界は明確」とする説を考えてみたい。

松中(2001a)では「*祖父が死んでいるうちに」は「死んでいる」という事態が明確な境界を持たないためウチニでは容認されないとしていた。たしかに、「死んでいる」という終止線を想定することは死後に復活する文脈がない限り無理である。しかし、時間的な終結点を持たない「死んでいる」という事態は、松中(2001b)が明確な境界を持たない時間表現としているアイダニを用いても次の様に非文になる。

(6) *祖父が死んでいるあいだにその遺産を親族で分配した。(松中2001a)

したがって、例文(5)が容認されないことは単にウチニの持つ時間的境界線が明確であることの証明にはならない。さらに、ウチニが逆に明確な境界線を持たない時間を示す例も存在する。例えば、「時がたつうちに」という表現である。「時がたつ」とは終点が特定されない不明確な時間である。もしウチニが明確な時間的境界線を持つ接続表現であるならば、この表現は容認されないはずである。したがって、ウチニは明確な時間的境界線を持ち、アイダニは明確な時間的境界線を持たないとする議論は認めることができない。

次は、ウチニが提示する時間が「時間的境界線は不定」とする Alfonso(1966)そして久野(1973)の説を考えてみよう。先に挙げた例「時がたつうちに」のように、ウチニは明確な境界線を持たない時間を提示することができる。しかし、ウチニが提示する時間が「時間的境界は明確」である例もある。久野(1973)によれば、「時間的境界線は不定」とは、具体的な時刻や日付を持たないということである。しかし、次の例を見られたい。

(7) 4時間目は2時40分からののですが、授業が始まらないうちに、ちょっと急いで図書館へ行って本を返してきます。

例文(7)で、試みにウチニが提示する期間の終点を言語的に明示してみたが、この文は容認可能である。また、次の例も見られたい。

(8) 4時間目は何時から始まるのでしたっけ。まだしばらくは時間があるでしょうから、授業が始まらないうちに、ちょっと急いで図書館へ行って本を返してきますね。

例文(8)で、ウチニが提示する期間の終点を不明確にしてみたが、文の容認度には変わりはない。

い。このことから、ウチニとアイダニの指し示す時間の具体的な時刻や日付が現実世界において具体的に話し手と聞き手の間で了解されているかどうかは、これらの語の本質的な意味の違いとは関わりのない事柄ではないかと思われる。ウチニにおいて本質的なのは時間的境界が特定されているかどうかではなく、境界の存在が想定されているかどうかである。しかも、時間的境界線の開始線と終止線は区別して論じる必要がある。なぜなら、ウチニ文で明確でないのは開始線の方であって終止線はその存在が明らかに想定されていると思われるからである。

1.2. 因果関係（浅野1975; 國廣1978）

浅野(1975)は、「PウチニQ」では、事象PとQの間に「因果関係」があると主張した。しかしながら國廣(1978)は、因果関係を含まない例を提出してこれを否定した。

浅野(1975:53)は、「Pの時間の経過・進行がQの発生・成立の要因になっている。すなわち、PとQのあいだには、何らかの意味で因果関係がある」場合にウチニが用いられるとして、ウチニ文を次のように類型化した。以下(9)－(12)の用例は浅野(1975)から引用したものである。

(9) 1. 並行型－行為的因果関係

話しているうちに、だんだん落ちて着いてきた。

(10) 2. 並行型－時間的因果関係

話し込んでいるうちに、暗くなってきた。

(11) 3. 遮断型－行為的因果関係

髪を洗っているうちに、シャンプーが目に入った。

(12) 4. 遮断型－時間的因果関係

そんな話をしているうちに、主人が帰ってきた。

しかし、國廣(1978)は、浅野(1975)が「時間的因果関係¹⁴⁾」の設定するなど「因果関係」を幅広く解釈して用いていると批判し、「因果関係」は事象PとQからの文脈の含意からくるものでありウチニの語彙の意味ではないと述べ、次の(13)(14)の「因果関係」のないウチニ文をあげて反証した。

(13) 着いて1時間もしないうちに暗くなってきた（1時間も経たない事は暗くなる事の原因ではありえないわけである）

(14) 知らないうちに雨が降ってきた（天候の変化を知らない事が雨が降る事の原因ではあり得ないわけである）

これらの例からわかるように「因果関係」はウチニ文に必ず見られる訳ではない。次の例も見られたい。

(15) 寝ているうちに宅配が来た

寝ている事が原因となって宅配がくることはあるだろうか。そんなことはあり得ないだろう。

したがって、「因果関係」は語用論的含意すなわち推意であると言うことができる。推意から生まれた「因果関係」は Grice 1995(1989)が指摘したように、発話のあとで否認することが可能である。

(16) そんな話をしているうちに、夫が帰ってきた。しかし、これら二つの出来事に因果関係はない。

一方、因果関係を表す接続表現カラを用いると(16)のようなスムーズなキャンセルはできなくなる¹⁵。例文(17)は容認されない。

(17) ?そんな話をしているから、夫が帰ってきた。しかし、これら二つの出来事に因果関係はない。

(16)のウチニ文が容認されるのは、ウチニでつながれた二事象間の因果関係が否認する余地を残した推意であったからであろう。一方、(17)のカラ文では、カラという因果関係を語彙の意味として持つ接続表現が用いられているため、直後にそれを否認しようとしても矛盾が生まれてしまう。「因果関係」は、ウチニの語彙の意味ではなく推意なのである。

1.3. 新しい事態への展開 $P \rightarrow \sim P$ (浅野1975; 國廣1978; 森田1980; 寺村1993; 渡辺1995)

本節では、浅野(1975)、國廣(1978)、森田(1980)、寺村(1993)、渡辺(1995)の主張の共通点を「新しい事態への展開 $P \rightarrow \sim P$ 」として検討するつもりである。

浅野(1975)は、ウチニ文で「PがQの出現によって終わり新しい事態が始まる」と述べている。

(18) 板きれにつかまって浮きつ沈みつしているうちに漁船が通りかかった。

(浅野1975:59)

このウチニ文で、PがQの出現によって終わり「漁船に助けられた」という展開が予想されると述べているが、次のように、後続文によってPがQの出現によって新しい事態が始まらない読みを可能にすることができる。

(19) 板きれにつかまって浮きつ沈みつしているうちに漁船が通りかかった。大声で叫んだが気づいてもらえず、私たちは海に浮かんだまま夜を明かした。

ウチニが用いられているからといって、新しい事態が始まる場合ばかりだとは限らないということになる。一方、アイダニは「PがQの出現によって終わり新しい事態が展開するときには用いない」と浅野は述べている。しかし、次のようにアイダニ文でもPがQの出現によって終わり新しい事態が展開する場合もある。

(20) 流しの中をひっかきまわしているあいだに、右手の中指の先をガラスのかげらで切ってしまった。私はしばらく指の腹から血があふれでて、それがウィスキーのラベルの上にぼたぼたと落ちる様子を眺めていた。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)

このアイダニ文ではPがQの出現によって終わり新しい事態が展開している。流しの中をひっかきまわして捜し物をしていた「私」はガラスのかけらで指先を切ったことによって、捜し物をやめ、指から血が出る様子を観察しているのである。したがって、「 $P \rightarrow \sim P$ 」という展開があるかどうかは、ウチニおよびアイダニの語彙の意味と直接的な関係があるとは言えない。

このほか、「対比」(國廣1978)・「状況変化の含み」(森田1980)・「対立的な状態」(寺村1993)・「やがてPではなくなるだろう、その前に」(渡辺1995)など、さまざまな説明が試みられているが、その共通するところは次のような想定である。

(21) 「 P ウチニ Q 」において、 P の先に成立する $\sim P$ において、 Q の成立が不可能また困難が伴う

この仮説を検討してみよう。まず第一に、先ほど(18)の例で述べたように、まず(21)で「 P の先に成立する $\sim P$ 」とされているが、 $\sim P$ は必ず成立するとは限らない。さらに、以下で、 $\sim P$ が成立する場合においても Q の成立が「不可能」であったり「困難が伴う」状況であるかどうかについて検討する。次の例を見られたい。

(22) 若いうちに苦勞したほうが良い

例文(22)で「若いウチニ苦勞する」という命題は、確かに若くない状態[$\sim P$]で苦勞する[Q の成立]のは、時に「不可能」であるし又「困難が伴う」状況であるといえるので、(21)の想定は成立する。しかし、次の例はどうだろうか。

(23) 若いうちに死んだ

この例では、若くない状態[$\sim P$]で死ぬ[Q の成立]のは、「不可能」でも「困難が伴う」わけでもない。したがって、(21)でなされた想定は不十分である。ここまで、先行研究で分析されたウチニの意味がことごとく適切ではないことを説明してきた。では、ウチニにはどのような意味があるのだろうか。これに関して、次の二節で詳しく取り扱っていくことにする。

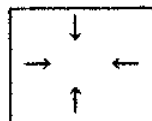
2. 時間的接続：「 P うちに Q 」の意味

2.1. 空間から時間へ：「うち(内)」と「うちに」のスキーマ

ウチニの「うち(内)」とは、もともと空間を指す言葉である。

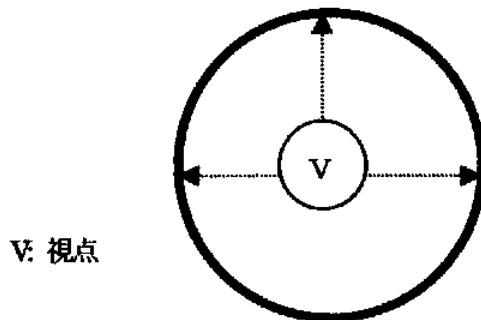
本節では、語の意味がスキーマ(図式)として概念化されると認

知言語学的に考え、これをスキーマで表すことを試みる。まず、図3 ウチ(渡辺 1995:25)
渡辺(1995:25)では次のようなスキーマが描かれている。



そして、この内側へと向いた力を「求心性」とよび、求心性のために境界線がより意識されると説明している。本稿では、この境界線が強く意識されるという渡辺の主張を、中心に話し手の視点を置いて境界へと向かうメンタルパス（破線矢印）を用いて話し手の意識を表した。

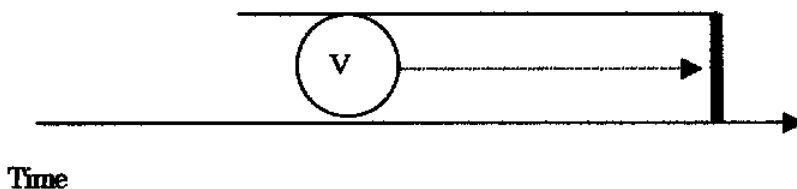
図4 「うち（内）」（空間）



空間は三次元である。空間表現「うち（内）」は、視点をその中心に置いて、「うち」と「そと」を転換する境界線を強く意識してメンタルパスを送っている。話し手の「視点」が中側にあることから、話し手が自分に関わる空間として「うち」をとらえている様子を表している。これは渡辺（1991）のいう「主体的意義」を持つ空間である。「うち（内）」は「そと（外）」に対し、自分の縄張りである空間を指す。

時間は空間のメタファーである（Lakoff 1987; 1990）。空間表現である「うち（内）」が時間表現にメタファー的写像されると考え次のように時間表現のウチニのスキーマ化を試みた。本稿では、ウチよりも接続表現としてより一般的なウチニを取り上げる。

図5 「うちに」（時間表現）



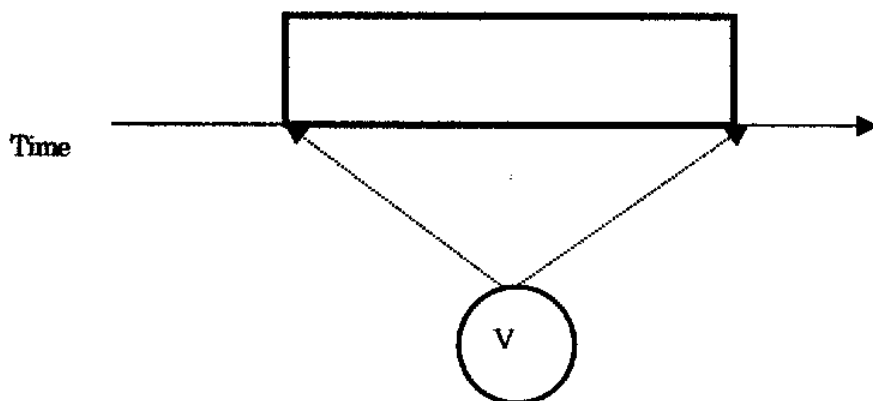
渡辺(1995)では、時間表現のウチニも「求心性」を受け継いでいるため、時の流れと逆になる境界線がより強く意識に上るとしている。このことを終点の境界線を太くして表した。また、Moore(2000)が指摘しているように時は一方向に流れ、人は未来に向かう傾向が強いと思われ

る。空間表現と同様、内側に視点を置いた話し手は未来にある終点を強く意識している。そのことを視点(V)からメンタルパス(破線の矢印)を終点の境界線へ送ることによって表した。人は前面にしか視線を送ることができないと想定し、開始点にはメンタルパスは送れないものとする。したがって、このような場合ウチニが提示する時間は、最終時だけがプロファイルされる。時間表現のウチニは、話し手の視点(V)が提示される時間の内側に入ることにより、話し手が時間を「自分に関わる流れ」として捉えていることを表している。

また、未来に向かってメンタルパスを送っているのも、Pだけではなく～Pの状況が(借景の如く)視野に入る。したがって、プロファイルされた境界線の内側だけを視野に入れ「Pのうちに」という表現も可能であり、またまだ起こっていない～Pの存在を引き合いに出して「～Pにならないうちに」という表現も可能である。「Pのうちに」も「～Pのうちに」も、境界線に注目していることには変わりはない。しかし、それが現実世界で何時何分であるかという客観的な知識は関係がないだろう。

次に、時間的表現のアイダニのスキーマも検討してみたい。「あいだに」という表現も、空間表現からのメタファー的写像であると考えられる。また、「AとBのアイダニ」また「一時と二時のアイダニ」という表現からも類推できるように、「あいだに」という時間表現では、その始まりと終わりは次で図示したように話者によって客観的に捉えられる。次の図を見られたい。

図6 「あいだに」(時間表現)



アイダニという時間的接続表現の場合は、「PとQのアイダニ」という表現が可能であることから明らかなように、開始点と終点の双方にメンタルパスを送らなくてはならない。したがって、話し手の「視点」(V)は時間の外側に位置しており時の流れを「自分から離れた流れ」として捉えていると考える。「*PとQのウチニ」という表現が容認できないことから、やはり、ウチニはどちらか一方だけにしかメンタルパスを送れないことがわかる。

これら図5と図6から、なぜ「近いウチニ／遠からぬウチニ」が言えて「*近いアイダニ／*遠からぬアイダニ」が言えないのか、またなぜ「長いアイダニ／短いあいだに」が言えて「*長いウチニ／*短いウチニ」が言えないのかの説明ができる。図5にあるように、ウチニでは話し手の視点が時間の中側に位置して未来を見つめている。このような場合、時間的境界（終点）に対して遠近を測ることはできても長短を測ることはできない。これに対して、図6にあるように、アイダニでは話し手の視点が時間の外側に位置しているので、外側から見て時間が長いのか短いのか、その長短を測ることができる。

次節では、ウチニ文をモデル化し、ウチニの持つ主体的意義を説明する。

2.2. ウチニの分析

ウチニのスキーマ（図5）は、次の三つのウチニ文のモデルに類型化されることができると考えることができる。ウチニは話し手の主体的意義が込められる表現であるとすでに述べたが、どのような気持ちが込められるのか検討してみよう。

①（まだ）PうちにQなんて。

これは、少なくともPの期間が終了するまでは非Qであることが普通であるのに、という気持ちが込められる。その気持ちは、一言でいうなら〈驚き〉である。

(24) まだ若いうちに死ぬなんて。

年を取ってから死ぬのが普通であるのに、若くして死んだという事実に対して、まず〈驚き〉の気持、それからこの場合残念な気持ちや悲運を嘆く気持ちも同時に表現されている。

(25) まだ髪をあらっているうちに友だちが来た。(来たなんて) (浅野 1975)

(26) 何頁も読まないうちに、信夫の心はたちまちこの小説の中に引き込まれて行った。

(引き込まれたなんて) (三浦綾子『塩狩峠』)

(27) 実はまだ青いうちに全部落ちた。(落ちたなんて) (井伏鱒二『黒い雨』)

これらにも、「－なんて」と言い換えられることから、予想外のことが起こったという〈驚き〉の気持ちが現れていると言える。

②P（ない）うちにQした方がよい。

これには、Pである期間を終了してしまうとQできなくなる、という場合や、Qすることが困難になったり不適当になったりする場合が含まれる。

(28) 暗くならないうちに、帰ってきなさい。(帰ってきた方がよい)

(29) 先生が来ないうちに、遊ぼうよ。(遊んだ方がよい)

Pである期間が終了すると出来ないという気持ちがあるため、モデル②はPが終わった後を肯定的に捉え、それを前提にしてPである期間を否定形で「－ないうちに」と表現とすることが

多いと思われる。したがって、そのような場合は、「ないうちにQした方がよい」となる。

③Pうちに（自然に）Qになる。

期間Pが終了する時点を心に思い浮かべ、その時点にはQが増していることを表す。また、何らかの変化が〈思いがけず〉起こったという〈驚き〉の気持ちが込められる。

(30) ポスターを眺めているうちに六時になった。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)

(31) 十八歳の年の僕にとって最高の書物はジョン・アップダイクの『ケンタウロス』だったが何度か読みかえすうちにそれは少しずつ最初の輝きを失って、フィッツジェラルドの『グレート・ギャッビー』にベストワンの地位をゆずりわたすことになった。(村上春樹『ノルウェイの森』)

(32) 話し込んでいるうちに、すっかり暗くなった。(浅野1975)

以上、ウチニ文は三つのタイプに大別される。これらに共通するウチニの中心的意味としてつぎのものが挙げられる。

(33) PウチニQ:

ウチニとはPである期間が終わった後も視野に入れ、その終了点を心に描く表現である。

したがって、「*年末までのうちに大掃除をしよう」が容認されないのは、「年末まで」という表現はPである期間が終わった後（年末が終わった後）が切り取られた表現だからである。

2.3. アイダニの分析

ウチニと比較すると、アイダニはその期間PのあいだにQが成立することを述べているだけであり、対象的意義しか持たない。ほとんどのウチニ文はアイダニ文と言い換える事ができるが、中には言い換えのできない文がある。

(34) 9時から5時のあいだに駅で待っていて下さい。

これはウチニ文では言い換えられない。それは、ウチニは時間の終了点しか心に思い浮かべられないのに対し、アイダニは開始点と終了点の両方を視野に入れることができるからである。

(35) (今から) 年末までのあいだに大掃除をしよう。

これもウチニ文では言い換えられない。それは、アイダニはPである時間が終了した後は視野に入れない時間表現だからである。

(36) 探検のあいだに調査する

これもウチニ文では言い換えられない。それは、調査は思いがけず自然に達成するものではな

く意図して行う行為でありそのPである期間に調査をし終えなければ二度と出来ないと言う特殊な文脈でも無い限りウチニの使用は適切ではない。(モデル②「探検しているうちに調査した方がよい(探検を終えて帰国してしまうと調査できなくなる)」という異なったニュアンスを含んでしまう。)

以上、アイダニの場合は事象Pの始まりと終わりを客観的にとらえた時間的表現であることを見た。アイダニは単に期間Pの中で、何かが起こる、あるいは完結する、また終わらずに続く、ということを述べている。

3. 結 語

複文には、無限にある出来事の中から選ばれた二つの出来事が一つの文の中に組み合わせられている。したがって、事象PとQのあいだには何らかの関係を話者自身が見出しているはずである。時間的接続においては、それは基本的には時間的關係であるはずだが、ウチニという時間的接続表現に関しては、主体的意義が関与することをスキーマ(図式)と三つのモデルに類型化することによって説明した。これに対し、アイダニは、対象的意義を持つ時間的接続表現である。

話者は、時間をこのように「自分に関わる流れ」また「自分から離れた流れ」と、主観的にも客観的にも捉えることができる。ウチニは、純粹に時の流れだけを記録するだけの接続表現ではなく、終了点を心に思い浮かべそれに対する心的な〈驚き〉や〈思いがけなさ〉を表す。これに対しアイダニは、終了点を心の中に思い浮かべることもなく、したがって、時間Qが終わった後のことは話し手の視野に入らない。幅のある時間を提示するこれら二つの時間的接続表現はこのように用法・機能を分担しており、微妙な意味の違いはその結果生まれるのである。

注

* 本稿は日本語用論学会第三回大会ワークショップ発表(2002年12月2日、於神戸市外国語大学)の内容を修正したものである。

- i) 本稿ではより一般的な時間的接続表現に焦点を絞り、「ウチ」ではなく「ウチニ」という表現を分析の対象とする。
- ii) 渡辺(1991:1)には、「わがこと」とは「話し手自身のこと」、「ひとごと」とは「話し手に関わりなく成立すること」という解説がある。
- iii) ここでいう「自分」とは話し手のことである。
- iv) 渡辺(1991)は助動詞などの副用語類を「わがこと・ひとごと」という観点から分析している。
- v) 渡辺(1997: 124-46)は、「主体的意義」は話し手の領域に属する意味であるとし、これに対して「対象

的意義」を述べられる対象の領域に属する意味とした。そして意味というものはこれら二つの意義にまたがっていると述べている。

- vi) 渡辺(1995:26)は、時間表現のウチに関し、その主体的意義は「傾向というにとどまり、時間用法への展開は明確な尾を引かない」と結論付けてしまっているが、本稿はこれを修正して、ウチニの持つ主体的意義は時間用法へも明確につながっていると論じている。
- vii) “*I hope my husband will become less hard on me *while* the years go by”は「時がたつうちに」という意味では“while the years go by”ではなく、“as the years go by”と言うべきなので間違いである。While の典型的な使い方は「何かが起こっている（ある状況が成立している）あいだに」というものだが、これには「長さ」と「終点」が必要である。この「終点」がないため“while the years go by”は不適切だし、「長さ」がないので“*He burst out while I opened the door.”は不適切である。正しくは“when I opened the door”となる。(The English Teacher's Magazine April (2000:75)を参照)
- viii) 國廣(1978:161-2)もこの「時間的因果関係」という概念は成立しないと述べている。
- ix) もともとノデに因果関係という意味があるため、100%キャンセルされることはない。この文は非容認となるか、あるいは容認された場合も因果関係が部分的にキャンセルされるにとどまるだろう。

《参考文献》

- 浅野百合子. 1975. 『「うちに」「あいだに」「まに」をめぐって』『日本語教育』vol.27, 53-62.
- Alfonso, A. 1966. *Japanese Language Patterns; a Structural Approach*. Vol.1. Sophia University.
- Grice, H. P. 1995(1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- 國廣哲弥. 1978. 「時間接続表現の意味—意義素の分析—」『国語と国文学』vol.55, 159-173.
- 久野 暉. 1972. 『日本文法研究』大修館書店.
- Lakoff, G. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago University Press.
- . 1990. “The Invariance Hypothesis: is Abstract Reason Based on Image-Schemas?” *Cognitive Linguistics* 1, 39-74.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語 2—意味と使い方』角川書店.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
- 松中義大. 2001a. 「接続助詞『うちに』の認知言語学的考察」『東京工芸大学芸術学部紀要第七号』, pp.41-49.
- . 2001b. 「接続助詞における空間から時間へのメタファー」(第二回日本認知言語学会全国大会 ワークショップ「空間と時間の認知と言語化」) 口頭発表ハンドアウト, 於大阪外国語大学, 2001年9月15日)
- Moore, K. E. 2000. *Spatial experience and temporal metaphors in Wolf: conceptual mapping and linguistic practice*. Ph.D. dissertation.. University of California, Berkeley.
- 渡辺 実. 1991. 『「わがこと・ひとごと」の観点と文法論』『国語学』165集.
- . 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つか—意味論的に—」『国語学』181集, 18-29.

———. 1997(1996)『日本語概説』岩波書店.

———. 2001.『さすが！ 日本語』ちくま新書.